

日風書局

第26号 1998年2月1日

〈高知県立歴史民俗資料館だより〉

人間が見える 書跡

企画展「維新の群像」展に寄せて

高知新聞社企画委員 谷

ただし
是

「書は人なり」というが、明治維新期の群像の書を見てみると、例外ではない。その人の生き様を憶いつつ、その書跡を眺めれば、時としてその風貌に接する憶いがあることがある。

土佐では、大変多くの書を残した人は土方久元、福岡孝弟、谷干城、後藤象二郎、佐々木高行、田中光顕、細川潤次郎らである。長命のせいでもあるが、ともかく書くことを好んだ人達で、明治期に入り、世の中が落ち着いてくると、彼達は自分の心情や思いを、沸々たる二行、四行詩に託して、表現したものである。

「大風呂敷」と言われた後藤などは、どの書を見ても、奔流に任せたとような一気呵成の書で、陽谷、雲涛などと号したが、評伝を見ると、運筆が最大の趣味であったらしい。土方も、小石川の林町の自邸には、大正期に入っても、座敷中、昔ながらの百目ローソクの燭台を林立させ、その中に坐している様に、若きジャーナリスト・野村胡堂などは、キモをつぶされたと言われるが、「胡堂百話」その中に毛氈を敷き、いつでも書けるようにしてあった。日

常の日課の中に、筆耕を位置付けていたものであろう。

筆が一気に走ったのは、福岡も同様で、どうも後藤と福岡などは、藩主山内容堂の日常生活の影響を受けていたと言えるかも知れない。書くことが、全く生活の一部になっていたと言うべきだろう。

波乱の時代でも、土佐では書跡を残した人が多かった。武市瑞山、吉村寅太郎、間崎滄浪、平井収二郎、中岡慎太郎、大橋慎、樋口真吉、北添倍磨らがそうだ。決して永い生涯ではなかったにしても、それぞれ個性溢れる書を残している。中でも吉村などは、一種独特のクセ字で、一見してもわかる特異なものだが、自己の志を詩に託して詠み残すことが、当時の人々には、教養であり、生き様であり、コミュニケーションの手段であったのであろう。明日をも知れぬ自己の命運を自覚し、今日ここに在る「ことの証しを残し、大事をなそうとする青年達の心情は、これらの一管の書跡に残されていた。彼達には自分の死の足音が聞こえていたのであり、その日のために、今日の

この命を燃焼させたものであった。今日のような、平和な、のんびんだらりとした日常ではなく、同僚、友人、知己が次々と死んで行く中で、次は自分の廻りだと思ふ、切迫した感情は、心情を吐露し、明日への覚悟を語り、死に臨んでは筆を執った。時としてその書は、壮絶であり、悲愴である。

明治期に入れば中島信行、俊子、林有造、竹内綱、大江卓、岩村通俊、島村速雄、大石正巳など多くの能書家も輩出する。中でも中島俊子の気力充実、女丈夫の筆勢は有名なもので、大江卓の豪毅、脱俗の気風は、クセ字の中にもよく現れている。能書ではあるが、書くことを好まなかった人は、板垣退助だ。多く所望されたであろうが、自分自身はうまいと思っていなかったのか、面倒だと思つたのか、極端に遺墨は少ない。坂本龍馬も書簡以外には、ほとんどなく、多少短冊などには残しているが、筆や印章を持ち歩く人ではなかった。多忙な日常のためであったのであろうか、彼の意識はそれよりも新しい技術や知識吸収にあったのであろう。しかしその書簡の筆跡は流麗で、自由奔放、一種の名墨とも言える。

人は死するが、書は生きて後世まで語り続ける。一管の筆跡にも、その時代と人の生き様を掬うことができる。この企画はそれを知る好機と言えよう。

「歴史と美術—維新の群像—」(前期)によせて

曾我満子

幕末から明治維新时期に新しい日本をつくろうとした人々に焦点をあてた企画展が三月二〇日からはじまります。

土佐出身者には勤王の志士が多く登場しました。反対にこのような立場の人々とは相容れない考え方の人もいました。また、幕末維新时期の歴史は土佐だけで語ることはできません。時代に生きた他藩出身者も取り上げています。今回の企画展は高知市民図書館で毎月行われている古書画鑑賞会の多大なご協力を得まして準備をすすめています。

書画はその人の個性を表現するといわれます。今回の展示では一字一字の文字を味わうことも見所の一つです。漢詩などは自らの心情を吐露したのも多数見受けられます。中国の古典にでてくる人物を理想としてつくられた詩、明治時代もかなり下った時期に維新期の述懐をし、詠んだ詩もあります。一流の絵描きの絵と比べれば決して上手とはいえませんが、文人的な教養を量り知ることのできる絵も数点出品されます。

坂本龍馬、山内容堂、後藤象二郎な

どだれでも知っている人物はもちろんのこと、歴史の陰に生きた人物にもスポットをあてたいと考え、県内のあちらこちらのお家で大切に保管されていた資料をお借りすることができました。では、前期の展示資料からいくつかご紹介します。

佐久間象山の七言律詩「海防論」。

象山は信州松代藩士で、思想・兵法家。門下生に勝海舟・吉田松陰・橋本左内らがあり、幕末期の思想に多大な影響を与えています。この漢詩は嘉永六(一八五三)年、ペリー来航の直前によまれています。「中州(日本)の豫備尚ほ依然たり」と外国船の脅威を警戒し、しかし反面城を守るには「却つて或いは渠が船を要せん」と兵制の改革の必要性も説いています。激動の時代に突入しようとするころ、象山は時代の変化を先駆けて感じ取っていたの

かもしれせん。

【訓読】
幾載か 鯨鯢 遠海に横たはる。中州の豫備尚ほ依然たり。

孰か知らん 兵制は時に従ひて變ずるを。

但だ説く 軍装の日に映じて鮮やかなるを。

礮を運ぶには未だ應に我が馬を須ふべからず。

城を守るには却つて或いは渠が船を要せん。

當今 更に無窮の事有り。志士 何れの時か 枕に安んじて眠らん。

癸丑の首夏、象山平啓手づから録す。

興味深い資料として前期では「鏡川夜涼みの図」を展示します。筆者を特定することが難しい資料ですが、この時代の雰囲気伝える資料として大変

貴重なものです。額仕立てで上半分は墨で絵が描かれています。下半分は朱の細かな文字で説明文がびっしりと書きこまれています。

慶応三(一八六七)年、まさに明治維新の前夜という時期のものです。

「當卯七月盆時分より、唐人町川原にて、夜涼甚盛二相成、四條川原夕涼なと、八同席の論二あらず。何によりて起る所にや、知るもの更になし。追々増長し、八朔の夜二至りて、錐を立るの地もなし。中島丁・播磨屋丁邊よりせり合押合□て、川原へ川原へと押し出入人数、相撲あかりの野道の如し」とあり、夏孟蘭盆(七月十三日から一五日)から八月になっても大勢の人々が鏡川の川原へ集まって賑わっているということが書かれています。この集まりはノエクリをきっかけとしたものだと言明されています。ノエクリというのは小若衆たちの遊びの名前で、蛇のように長い行列になって末尾の者を鬼がつかまえ、鬼役を交代する遊びです。

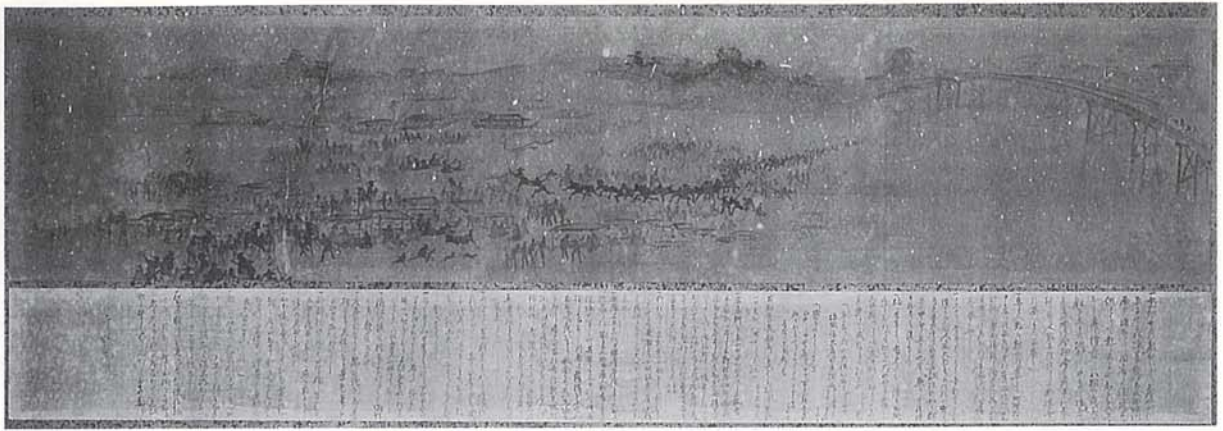
また、大仏踊りと称し、円形を組んで踊る群れもある、と書かれています。同じ頃、名古屋地方などに「ええじゃないか」の踊りも流行っており、明治維新前夜はまさに民衆のエネルギーが異常な盛り上がりを見せた時期だといえそうです。

幾載鯨鯢横遠海中州豫備尚依然孰知兵制従時變但說
軍裝映鮮運礮未應直我馬守城却或吾渠船當今更有首夏窮
事志す時安枕眠

佐久間象山七言律詩(個人蔵)

佐久間象山七言律詩(個人蔵)

*…□は虫食いにより判読不明



慶応三年鏡川夜涼みの図（横島佐治男氏藏）

土方久元

七言絶句「太宰府客舎書感」

一八六三年八月一八日の政変で七卿

の都落ちに随従した土方の胸中を詠んだもの。

だもの。

土方久元 七言絶句（個人蔵）

るは月夜 不敵身曾憂 殊志能成 甲
望國 亦能成 却向民間 向かひ 苦辛
太宰府客舎 小紙 一 幸の詩文

中に在るべし。
李斯 滄浪亭主人

漢詩「伊丹酒を讀める歌」

酒を好んだ容堂らし

い詩。

【訓読】

撰州 用武は論ぜずと

も可なり。唯だ喜ぶ伊

間崎滄浪 七言絶句「李斯」

秦の始皇帝に仕え焚書坑儒を行った

李斯の生き方を非難して詠んだもの。

太宰府の客舎に感を書す。

秦山樵史

酒を好んだ容堂らし
撰州 用武は論ぜずと
も可なり。唯だ喜ぶ伊

山内容堂 漢詩（竹本義明氏蔵）

【訓読】

士を坑にし書を焚き 天下空し。主は

亡び國は乱る 一身家。太倉に粟を食

らひ何事を竟めん。此の鼠牴だ應に厠

佐士 焚書 坑儒 行つた 李斯 七言絶句
李斯の生き方を非難して詠んだもの。

間崎滄浪 七言絶句（個人蔵）

丹の酒の甘からざるを。

醇醪吾も亦京口に求む。

常に待つ 輕風の南よ

り吹くを。

金色 吾が眼を射、一

滴

釀す者は丹人 飲む者は我。大尊號有

り正宗と曰ふ。

腰間 論ずるに値せんや三尺の劔。胸

裏常に有り百鍊の鋒。
子望

三條実万

四行書「人主惟有一心而攻之者甚衆」

人主とは君主のこと。これに対して

勇氣やおべんぢやらやその他諸々で君

主を攻め、その一つでも受けてしまふ

と危うい事態となるという意味。

人主惟有一心而攻之者甚衆或
以勇力或以辨口或以詭諛或
以奸詐或以塔皆欲輻輳攻之各求
自售人主少懈而受其則危亡隨之

三條実万 四行書（館蔵）

【訓読】

人主は惟だ一心有るのみにして、これ

を攻むる者は甚だ衆し。或いは勇力を

以てし、或いは辨口を以てし、或いは

詭諛を以てし、或いは奸詐を以てし、

或いは嗜欲を以てし、輻輳してこれを

攻め、各おの求めて自ら售る。人主少

し懈りて其の一を受くれば、則ち危亡

これに隨ふ。

以上、展示資料の一部を紹介しまし

た。この他に三十点ほど展示します。

その個性あふれる書に触れていただけ

ればと思います。

企画展

「歴史と美術—維新の群像—」（前期）

会期：三月二〇日（金）～四月一九日（日）

三月二〇日はテラブックカットのため開館は

十時となります。



今回は、郷土玩具のための部屋が2つもある、山崎茂さん（大正九年生まれ）のお宅を訪ねました。当館は故城田政治さんが収集したコレクションを収蔵していますが、山崎さんは城田さん亡き後の高知県における郷土玩具収集の第一人者です。全国各地から集めた玩具はなんと一万点以上。当館の平成六年度の企画展「おもちゃ―遊びのかたち―」でも、いろいろと教えていただいたことでした。そんな山崎さんに、郷土玩具の魅力をたっぷり語っていただきました。

お話が弾むと山崎さんは珍しい玩具を次々と出して来て下さるので、いつしか机の上がいっぱいになりました。愛らしい郷土玩具に囲まれた人生についてうかがい、楽しいひとときを過ごさせていただきました。

干支の郷土玩具展を続けて

毎年一月に高知市民図書館で干支の郷土玩具展を開いています。これは、一三年前の丑年からはじめました。きっかけは、その前の年に高知郵便局で「年賀切手の元になった郷土玩具を展示して欲しい」と頼まれたことでした。その展示をご覧になった市民図書館の職員の方に「ぜひうちでも展示してくれないか」と言われたんです。その時は、集めた玩具の点数がまだまだ少なかったのですが、牛の玩具に、他の玩具も交せて展示しました。

干支の玩具展は毎回、前の年の一月に準備を始めます。どう並べるかを図面に書いて、玩具一点ごとに作者や製作地を書いた説明の紙片を作ります。運ぶときに壊れないように、しっかりと箱に詰めておいて、年を越すんです。展示も手弁当で、私にできるボランティアと思つてずっと続けてきました。

初日と二日は新聞記者が来るので、私も会場に詰めています。展示を見に来た方にも解説していますが、そんなとき、「正月が楽しみです」「ファンで

す」と言ってくれる方もいるんです。そう言われると嬉しいもんで、やめられなくなつて、とうとう干支も一巡し、今年は二度目の寅でした。

今年の干支、虎玩具

虎の玩具は張子が多いですね。虎は異国の動物ですが、江戸時代に見世物として日本に来ていました。猛獣を愉快な張子の首振り虎にしたのは、大阪の人形屋、新六の考案といわれています。よくぞしたものだと思えますね。元和元年（一六一五年）、大坂夏の陣の頃のことだそうです。

虎の玩具にはいろいろな由来があります。例えば、「神農の虎」。神農は中国の伝説上の帝王で、薬の本草書を著したとされていますが、大阪道修町の少彦名神社は、我が国医薬の神、少彦名命と、この神農を祀っています。幕末にころり（コレラ）が流行り、道修町の薬商が虎の頭の骨を粉にした丸薬を作つたそうです。それがやがて、少彦名神社で授与される張子の虎に、人々が病避けの御利益を求めるようになったということです。

近松門左衛門の「国性爺合戦」に題を取つた「和藤内」などの張子の他、土人形では「加藤清正の虎退治」や本尊毘沙門天にちなんだ「鞍馬寺の虎」が知られています。珍しいところで

は大阪に土人形で首を振る虎もあります。

郷土玩具の魅力

虎に限らず、郷土玩具には物語があります。私が一番引かれるのは、そこなんです。土佐では「坊さんかんざし」の純真お馬の物語が有名ですね。

例えば、練り物の郷土玩具で有名な埼玉県の鴻巣は、箆筒など桐細工が盛んです。それで、おが屑がようけ出るんですが、火力が弱くて燃料にもならない。そのおが屑を布海苔で固めて練り物にしたのです。郷土玩具にはこうした誕生の物語もあるんですよ。

また、「赤物」と言われる鴻巣の練り物ですが、赤は疱瘡が嫌う色といわれ、庶民には薬も医者も縁遠かった時代、枕元に置いて子どもを病いから守ろうとしたのです。このような願いのこめられたものや、寺社で授与されるものなど、信仰と結び付いた郷土玩具が多いのです。

それに郷土玩具には地方地方の個性がある。千差万別で、それは面白いですよ。これ程たくさん種類の玩具がある国は、日本より他にないでしょう。それが、作り手が居なくなり廃絶するものも多く、消えつつあるのは淋しい限りです。もっと郷土玩具の魅力を知って欲しい。それで、市民図書館での

千支の玩具展を続け、頼まれれば市町村の催し物に出品するんです。

この間、青森県の八戸はちのへに行ってきた。八戸には郷土玩具の「八幡駒」があります、これも昔ながらの大口保直次郎さんのものがいいですね。たてがみや尻尾には本物の馬の毛を使っている。それに炭や果物の汁で色を塗ってあって、なんとも言えない味があるんです。最近、他に会社が量産しているんですが、エナメルで塗っていて、全く違います。観光玩具は見飽きるが、郷土玩具は長年見ても見飽きらないですね。伝統の値打ちだと思います。

郷土玩具を眺めていると心が安らぎ、ストレスも解消します。中でも伏見や津屋崎、堤や古賀の土人形などが、私は特に好きです。紺やグレーなど渋い色目が実にいいんです。

「集める」ということ

子どもって、何か集めていると一つより二つ欲しい、二つより三つ欲しいがるものでしょう。それと同じで私も幾つになっても、ようけ欲しいんです。幼児性が抜けないんですね。

昭和四三年の年賀切手が宮崎県の「のぼり猿」でした。それがはじめて手に入れた郷土玩具です。四八歳のことで、子やらいも済んで、何か趣味を……と思ったときに、郷土玩具に出会っ



山崎 茂さんの郷土玩具の部屋

たわけです。好きだった旅行に旅先で郷土玩具を買い求める楽しさが加わりました。庶民の玩具ですから、値段も安く、サラリーマンの給料で気軽に集められることも魅力でした。今では値段も高くなってしまいましたけどね。欲しいと願っていた玩具が、手に入った時の喜びといったら、こたえられません。収集家とはそういうものだと思いますよ。広島県の三次みよし土人形に

「松負い天神」というのがあるんですが、これが実に欲しかった。なかなか手に入らなくて、やっと手に入れた時の嬉しかったことは、よう忘れません。熱心に集めていたときには、同じものが二つ三つあっても、手放さなかったもんです。けれど、最近と同じものがあれば可愛がってくれる人には、さしあげることも多くなりましたよ。そういう心境に達したというわけです。関

心のない人にはいくら高いお金を積まれても、譲るとは御免ですがね。

それでは、これから集める人たちに、いくつかお教えいたしましょうか。

郷土玩具を愛好する仲間のことを私たちは「玩友がんゆう」と呼ぶんですが、いい玩友を持つことが大切です。私には土佐で手に入らないものでも送ってくれる玩友がいます。反対に私が旅行に行ったところで、その人たちが必要とする玩具を買って送ってあげるとい具合です。

土佐以外には各地に郷土玩具愛好家の会の会や研究会がありますから、それらに入会するのもいいと思

ます。

それから、家族の理解を得るということも必要です。たくさんの玩具を家の中で隠れて集めることは出来ませんからね（笑）。

土佐の郷土玩具

郷土玩具を集める人には、こけしだけ、ダルマだけ、猫だけというように集める人もいますが、私は郷土玩具と名のつくものは何でも集めました。それで全国のあらゆる種類の郷土玩具が集まっているわけです。山本香泉こうせんさんの土人形や張子面、岡林藤吉さんの帆傘船や箸拳人形、鯨船や鯨車など、土佐の郷土玩具は特に揃っています。

山本さんの土人形などは、型が土佐民芸社に受け継がれ、徐々に復活しています。その際、私のところで、色を確認しています。土佐の郷土玩具の中心の祖ともいえる岡林さんが城田政治さんの元に通って昔の玩具を見せてもらったようにね。長年やってきて良かったと思うことのひとつには、土佐の郷土玩具の復活に協力できるということです。

私が集めた郷土玩具のうち土佐の分は、いつか歴史館に寄贈しますよ。そうすることが、将来の土佐のためになると思うのです。

（文責 中村淳子）

土佐の鰐口(3)

—高知に戻ってきた鰐口(寄贈資料から)—

平成九年に寄贈された考古資料の中に永享七年(一四三五)銘鰐口(資料番号97-3-00001)一口がある。

この鰐口は、史料から銘文の内容は知られていたが、その所在は明らかでなかった。

この鰐口とは、谷垣守(かきもり)が享保から元文(一七一六-一七四一)にかけて編纂した『土佐国靈簡集拾遺』に記されている鰐口銘である。それは、

「土州八裨庄正法寺常住住苺永享七乙卯十二月八日吉重敬白 右土佐郡久萬村 鰐口之銘也」(高知県『高知県史』古代・中世史料編 一九七七年三月)

の銘を記録したものである。

鰐口銘については、文化八年(一八一一)に武藤平道の編纂した『土左國古文叢』にも以下のようにある。

「土州八裨庄正法寺常住住苺永享七乙卯十二月八日吉重敬白 右一通土佐ノ郡久万村金性院ニ蔵ル鰐口ノ銘也凡テ二通ノ第一紙」(高知県『高知県史』古代・中世史料編 一九七七年三月)とある。

文化一〇年(二八一三)の『南路志』(一九五九年一〇月復刻)の久万村の項には

「妙色山靈安寺金性院真言宗 寺領 壹石壹斗壹升三合 鰐口有其銘 土州八裨庄正法寺常住住苺永享七乙卯十二月八日吉二里敬白」

とあり、現在の高知市久万の正法寺に鰐口があることが見えている。

明治年間に出版された稲毛実の「土佐国古鐘類聚」(『土佐国群書類従』一四九)には、

「土州八裨庄正法寺常住住苺永享七乙卯十二月八日吉重敬白 右土佐郡久万村金性院鰐口按八裨蓋羽根也在安喜郡正法寺今廢」とある。

香取秀真の『金鼓と鰐口』(一九二三年(大正一二)三月)には、

「(一一二) 土佐安芸郡羽根村 正法寺(撰津堺正井氏蔵) 土州八裨庄正法寺常住也 永享七乙卯十二月八日吉重敬白 径五寸六分(高橋氏拓)(撰河泉金石史)」

とある。この鰐口は、大正時代には大阪堺の正井氏の所有するところとなっ

ていたことがわかる。鰐口は、明治から大正時代にかけて県外流出しと考えられ、大正一二年には大阪堺の正井氏の所有となりそれ以後、鰐口の所在は不明であった。その後、好事家の手を何度か経て、今回所蔵者のご厚意で高知県に寄贈された。寺の盛衰に翻弄された鰐口は、不思議な縁で土佐に戻ってきた。

この鰐口は青銅製で、両面に黒い付着物があり、黒漆が塗布されていたと考えられる。黒い付着物の剥げた所は一部赤銅色をしている。上下の長さは一八・二cm、直径一六・七cm、目から目までの長さは一九・二cm、耳は片面交互式で二・二cm突出する。目は、一・一cm突出する。口は〇・九cm出ている。銘帯は二重の界線を造り出し、内区は二重の界線で撞座を囲んでいる。

撞座は無文である。

銘は片面のみに刻されている。銘文は銘帯に右廻りに

「土州八裨庄正法寺常住住苺」左廻りに

「永享七乙卯十二月八日吉重敬白」と刻してある。この鰐口は銘文から、永享七年(一四三五)に正法寺の本堂に懸けられた鰐口であることが推測できる。正法寺の法灯が永享七年まで遡ることもこの鰐口から明確になった。

正法寺は、天正一七年(一五八九)の『長宗我部地検帳』『安喜郡羽根村地検帳』『長宗我部地検帳』安芸郡上一九五九年七月)の「天王サキ之村」に「正法寺中」とみえており法灯の継続が認められる。正法寺は後の江戸期に廃寺化したと考えられる。詳細については別項で記したい。



鰐口(銘文)



鰐口(裏)

本棚「今村楽歌文集」

竹本義明氏編著

今村^{たぬし}楽は近世土佐の最高の歌人と評
価されている。楽は高知城下の下級武
士に生まれ、谷真潮^{たにまほし}から国学を学び、
万葉集に倣い、古風^{いにしへぶり}の歌を詠み、学
問をよくした。

竹本氏は本著の序において、『今村
楽家集』に出会った時の楽の作風につ
いて「穏健で平凡」と評しておられる
が、読み返すうちに、「よく見、よく
感じ、素直な言葉で表現」していると
評価し、楽が心の友となったことを書
いておられる。歌は人なり、とでもい
うべきであろうか、氏は楽の人柄に惹
きつけられ、出会いから二〇年の集大
成が本書である。

楽は古風の歌とは「知的技巧を交え
ず、現実の感動を純一に詠み出すこと
を旨とし、心と調べを念頭において作
歌すべきもの」という。楽の佳品は長
歌に多い。調べを重視する楽ならではの
リズム感が織り込まれているからで
ある。

解説「今村楽の死に臨める態度」に
は楽の非業の最期が綴^{つづ}られている。公
金横領の罪に連座させられ、渡川以西
に追放の身となり、今村家は断絶する。

しかし、辞世の句には「底ひなく濁り
尽くして鏡川水上清く月は澄みけり」
と気高き心を詠み込んでいる。氏は
「いかに死ぬかはいかに生きてきたか
の証明」という。

本書は八〇〇頁にも及ぶ大著である。
今日見ることが出来る楽の資料すべて
が集められている。長歌、短歌、狂歌、
漢詩、紀行文、論考、書簡など多彩で
豊富な資料を精査し、丁寧な校注を加
えている。歌には土佐の風景を詠んだ
ものも多数あり、私たちにも親しみや
すい。楽の生きざまがよくわかる本で
ある。

(土佐史談会発行 三〇〇〇円)

(曾我)



建築文化講座 『民家に学ぶ』

当館初の連続講座として、『民家に
学ぶ』を実施しました。土佐の風土に
育てられ、数世紀にわたる知恵が形に
なった伝統的民家に学ぼうという講座
で、定員四〇名が計六回受講するとい
う形をとりました。土佐を東部・中央
・西部に分けての地域別解説の他、バ
ス見学や民家写真の撮り方などの実習
も盛り込みました。



講座「民家に学ぶ」第六回 平面図実測

好評の史跡めぐり『町並みウォッチ
ング』シリーズも当館では継続中ですが、こちらは一日だけのバス見学です
ので、より深く町並みや民家について
学びたい方のため、自らが積極的に調
べることができるようにと企画した一
歩進んだ講座でした。

講師には、建造物関係の県内文化財
調査の第一線で活躍されている溝渕博
彦先生・後藤孝一先生・田中耕輔先生
をお迎えしました。第四回目的のバス見
学では、溝渕先生のご案内で先頃改修
が終わった田野町の岡御殿と未改修の
旧岡家住宅(西の岡)を比較見学した
他、普段は未公開の奈半利町の大西邸
なども見学しました。民家スケッチの
ミニギャラリーが当館のA Vホールに
当日限り登場した第五回目には、後藤
先生から民家スケッチの秘密のテクニ
ックまでご披露いただきました。

最終日は田中先生による屋外展示民
家を利用しての平面図実測でした。こ
れまで句会や子ども歴史教室などで、
集いの場、或いは雰囲気醸し出すた
めの舞台装置として使用することが多
かった民家を教材として活かすこと
も今回の講座の成果と言えます。す
平面図実測の後、受講者一人一人に修
了証書を当館の副館長が手渡して、四
ヶ月に渡る講座を終えました。(中村)

2～3月の催し物

〔企画展〕

3.20～4.19	歴史と美術 —維新の群像— (前期)	幕末から明治時代にかけて活躍した著名な土佐人の書などを展示します。
-----------	-----------------------	-----------------------------------

〔講演会〕 午後2時～4時 聴講無料 葉書にてお申し込み下さい (定員100名まで。先着順)

3.28(土)	維新の群像 —その漢詩あれこれ—	竹本義明先生 (土佐女子中高等学校教諭)
---------	---------------------	----------------------

〔子ども歴史教室〕 *電話などで事前にお申し込み下さい。(先着順)

2.14(土)	火おこし	昔の火おこしを体験します。(定員30名) 10:00～12:00
3.21(祝・土)	親子史跡巡り—維新の史跡—	高知市内を中心に維新の史跡を巡ります。(定員30名、バス利用) 10:00～16:00

〔企画コーナー〕

2.1～	堀見家の考古資料 —銅鐸の拓本—	現在では、採拓するのは不可能な弥生時代の銅鐸の貴重な拓本を展示します。
------	---------------------	-------------------------------------

開催決定

特別展

「からくり—夢と科学の世界—」

会期 平成一〇年七月一七日～九月二三日

さうご期待。

出版物のご案内

研究紀要第6号

600円 (送料 1冊310円)

〔調査報告〕

平成7年度資料調査員調査報告I

木造川舟の造船記録—梶原川のつり舟を中心に—

田辺 寿 男

寺石正路資料調査報告I

—南方熊楠らとの交流を中心にして— 上

野 本 亮

〔資料紹介〕

幕末から明治期における堀見家の土地集積

下 村 公 彦

高知県仁淀村大植又七畑の出土和鏡について

岡 本 桂 典

城下町家扣

吉 村 淑 甫 恵

商家「木屋」の『年譜』

高 松 恵

〔歴民館日録〕

月 日	出 来 事
平成九年 十月 四日	連続講座「民家に学ぶ③」
十月 十八日	講座「浄土への祈り」埋経が語る永遠の世界」
十一月 二五日	史跡巡り「町並みウォッチングII」
十一月 八日	連続講座「民家に学ぶ④」
十一月 十四日	企画展「いざなぎ流—神と人のものがたり—」開幕
十一月 十五日	連続講座「民家に学ぶ⑤」
十一月 二九日	公演「いざなぎ流の宅神祭」
十二月 六日	企画展講演会・シンポジウム
十二月 六日	連続講座「民家に学ぶ⑥」
十二月 六日	史跡巡り「新発見考古速報97」見学
十二月 十三日	子ども歴史教室「もちつき」
十二月 二十日	講座「いざなぎ流I」
平成十年 一月 十日	講座「いざなぎ流II」
一月 二五日	企画展「いざなぎ流—神と人のものがたり—」閉幕

〈ひとこと〉

「いざなぎ流」展では、保存会をはじめ多くの方々の力が結集され、展示を開催することができました。(梅野)

平成十年二月一日
編集・発行 高知県立歴史民俗資料館

〒783-0044 南国市岡豊町八幡1099-1
TEL 0888(62)2211
FAX 0888(62)2110

開館時間 午前9時～午後5時
(入館は午後4時30分まで)

休館日 毎週月曜日(祝日及び振替休日)
あたる場合は翌日(12月28日)1月4日

入館料 通常期(常設展)大人(18歳以上)400円
団体(20人以上)320円
高校生以下は無料

療育手帳・身体障害者(1・2級)手帳・障害者手帳所持者とその介護者(1名)、高知県長寿手帳所持者は無料
印刷・南 飛 鳥